ＶＲＭＭＯをするのです。

雪原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＶＲＭＭＯをするのです。

【Ｎコード】
Ｎ８０６０ＢＨ

【作者名】
雪原

【あらすじ】
ＶＲをつくったのです。
つかいみちがおもいつかなくて友人にきいたのです。

「あなたのすきなことはなんですか？」

友人はこういったのです。

「ネトゲだな。特にアクションモノ。」

だからわたしはつくったのです。
ＶＲＭＭＯＡＲＰＧを。

つくったのです。（前書き）

非常にしつこい表現があるのです。
いやなかたはＢｒｏｗｓｅｒ　Ｂａｃｈするのです。

つくったのです。

ＶＲをつくったのです。
誰にも教えないでこつこつＰｒｏｇｒａｍ（プログラム）もつくりました。
ほとんど完成したのですがまだ実際になかにははいったことがないのです。
設計上はなにも問題ないのですがみえない不備というものはどこにでもあるのです。
生き物で実験はきがひけるのです。ではなにで実験すればいいでしょう？じぶんしかいませんね…。
安全には十分きをつかうのです。出力は最低限度にするのです。
Ｔｉｍｅｒ（タイマー）でｌｏｇｏｕｔ（ログアウト）する機能もつけるのです。ほかにもたくさんつけたのです。
あしたはいよいよ実験なのです。

次の日です。

いよいよなのです。
本体は家庭向けに調整してあるのです。ふとんのうえでつかうことを想定して後頭部に干渉しないつくりになっているのです。
わたしが今回つかうのはＴｉａｒａ（ティアラ）型ですがほとんど装飾はないのです。予算が底をついたわけではないのですよ？けっして。給与の前借りをしようとして断られたわけでもないのですよ？ほんとうです。

ではいってみるのです。
起動言語はｓｔａｒｔ（スタート）　ｕｐ（アップ）なのです。
ｓｙｓｔｅｍ（システム）がたちあがったら視界に投影されたｉｃｏｎ（アイコン）からＡ（アームズ）

ｒｍｓというｌｏｇｏ（ロゴ）をみつめるのです。
起動言語のｓｅｌｅｃｔ（セレクト）というとＡｒｍｓがたちあがるのです。
暫くまつといろいろな言語でようこそ！と表示されるのです。言語のうちよめるものをみつめるのです。そして、ｓｅｌｅｃｔ（セレクト）というのです。もう解りますよね。なにかを選びたいときはｓｅｌｅｃｔ（セレクト）というのです。

今回はｃｈａｒａｃｔｅｒ（キャラクター）　ｃｒｅａｔｅ（クリエイト）は省略するのです。動作確認がもくてきなので容姿をいじるひつようはないのです。じぶんすがたのそのままなのです。
うむむ…全身に少しずつ感覚がかえってきました。
うっ…まぶしいのです。めのおくがちかちかします。
めをあけたままｌｏｇｉｎ（ログイン）したらめが痛いのです。光源の発光強度がさいしょからふつうに設定してあったのがわるいのでしょうか。よく考えるとわざわざめをとじたりしないのです。
対策として各感覚をすべてｆａｄｅ（フェード）　ｉｎ（イン）にするのです。べつにｌｏｇｉｎ（ログイン）した途端酩酊感におそわれたわけではないのです。ほんとうですよ？

まずは各感覚の強度調整をするのです。
視覚を調整するのです。いろいろな色やあかるさの部屋を用意するのです。数値に対する体感を身体でおぼえてあとでｐｒｏｇｒａｍ（プログラム）を調整するのです。
うぅ…酔ったのです。きもちわるいうえにあたまが痛いのです。十分きゅうけいなのです。
聴覚を調整するのです。いろいろな音をいろいろな状況からきくのです。
うぅ…うぇっ！なにも……でないのです。身体のなか全てをつくり込んだわけではないのです。実はいっかい全部つくったのですが容量がおおきすぎたのです。ｏｒｚなのです。

触覚を調整するのです。いろんなものを触るのです。
温度をかんじないと感覚が解りずらいことがわかったのです。温感も纏めて調整してしまうのです。体温設定を３６．５℃に設定していろいろ触るのです。
っ！？熱かったのです…。現実には影響ないはずなのですが精神的に影響が出そうなのでＳｅｎｓｅ（センス）　Ｌｉｍｉｔ（リミット）　ｆｕｎｃｔｉｏｎ（ファンクション）はつけることにするのです。
次は…痛覚を調整するのです。やりたくないのです。Ｐａｉｎ（ペイン）　Ａｂｓｏｒｂｅｒ（アブソーバー）の調整には痛覚の調整は必須なのです。
…きょうはもうむりなのです。自傷はもうたくさんです。痛いのもうや…。
あ、関節まわりとかの調整わすれてたのです。あしたでいいかな。

では、きょうのところはこれでおわりなのです。

次の日です。

早速（ログイン）ｌｏｇｉｎするのです。
きょうはきのうやらなかった身体の可動確認をするのです。方法はとてもＳｉｍｐｌｅ（シンプル）なのです。みんなだいすきらじおたいそー！なのです。
うーん。疲労は導入したほうがよいでしょうか。折角なので導入するのです。
ちょっとＲｅａｌｉｔｙ（リアリティ）たかめでつくるのです。内容はどうしましょうか。
あ、わたしのすきな小説みたいに魔法なしの世界なのです。でも、遠距離がＢｏｗ（ボウ）だけでは不安なのでＳｌｉｎｇ（スリング）も導入するのです。
Ｃｌｏｓｅｂｏｗ（クロスボウ）は今回はなしなのです。投擲系の装備もおおめに導入するのです。

いちおうＰｒｏｇｒａｍ（プログラム）はなかでもつくれるようにしてあるのです。ＶＲの調整をもうすこししたら今度はＧａｍｅＰｒｏｇｒａｍ（ゲームプログラム）の調整と追加もしていくのです。

では、残りの調整もやってしまうのです。

おもったより残りが多かったのです。きょうはおわりです。

次の日です。

きょうはＶＲはおやすみです。

ＧａｍｅＰｒｏｇｒａｍ（ゲームプログラム）の調整と追加です。

基本はきのういっていた小説とおなじですがＳｋｉｌｌ（スキル）の発動条件の緩和をめざすのです。よくある起動言語型やＭｏｔｉｏｎ（モーション）型はけっこう発動条件がかつかつなのである程度自由にうごかせるよう調整するのです。

…なんだかつくったＳｋｉｌｌ（スキル）を再確認したらやになったのです。何千個あるんでしょう…？うぅ…がんばります。

やっと終わった…（パタッ…Ｚｚｚ。

つくったのです。（後書き）

変換にかんしては基本的にわざとなのです。

感想・誤字報告・批判なんでもござれーなのです。

ｔｅｓｔｅｒを募集なのです。（前書き）

９／４　加筆修正したのです。
９／１７　ルビ追加したのです。

ｔｅｓｔｅｒを募集なのです。

おはようございます。

今日はＶＲとＧａｍｅ（ゲーム）　Ｐｒｏｇｒａｍ（プログラム）の調整がだいたいおわったので、Ｔｅｓｔｅｒ（テスター）になってくれる方をさがすのです。人数はあまり多くはできないのです。本体がないのです。

ひとまず広告をいろいろなところにはるのです。広告は、動画と静画、ｓｉｔｅ（サイト）のｌｉｎｋ（リンク）を用意したのです。動画ｓｉｔｅ（サイト）に投稿すればそれなりのひとがみてくれるとおもうのです。Ｎｅｗｓ（ニュース）のｓｉｔｅ（サイト）などにもおねがいするのです。

しらべてみるとたくさんのｓｉｔｅ（サイト）があるようなのです。これは大仕事になりそうなのです。

いまできるぶんはこれでいいのです。あとは許可の必要なｓｉｔｅ（サイト）の広告だけなのです。

４日後です。

やっと広告ぜんぶだせました。お金の力は偉大なのです。

あとは応募が来たらです。そして実はもうやることがないのです。仕方がないので、Ｕｐｄａｔｅ（アップデート）用の追加Ｐａｃｋａｇｅ（パッケージ）を考えるのです。Ｉｔｅｍ（アイテム）を１００っこくらいとＭＯＢ（モブ）何体かとＦｉｅｌｄ（フィールド）もひとつかふたつ考えるのです。しばらくはそうしましょう。

一週間後です。

応募期間はすこし短めでしたが８にんの応募があったのです。今

日は会場まで案内してさっそくｔｅｓｔ（テスト）にとりかかるのです。
　…よくかんがえると見ず知らずのひとと会話できるきがしないのです。彼に頼むのです。彼となら顔をあわせても普通に会話できるのです。電話は…あったのです。
「もしもし？」
「もし？碧城（あおき）だけど…。」
「深月なのです。お話いいです？」
「ん～？いいけど。」
「ちょっと、Ｇａｍｅ（ゲーム）のｔｅｓｔ（テスト）をするのでＴｅｓｔｅｒ（テスター）さんを案内してほしいのです。」
「ふーん。いいよ。（横文字多いな…）」
「…え？」
「いや、だから、いいよって。やっちゃる。（暇つぶしキターーーッ）」
「いいのです？詳しい話もなにも…」
「おまえあれだろ？どうせ、初対面の人と話せる気がしないから電話してきたんだろ？それに頼る宛も無いんだろ？それに、お前の作ったゲームに興味もあるしな。バッチリ決めてやろう。」
「えっと…その通りなのです。お願するのです。」
「お～適当に任せておきたまえ。」
「詳しい説明ですが…

　…というわけなのです。」
「了解。じゃ、９時な。（…あれ？一時間で行けたか？）」
「はいなのです。」
　予想外にすんなりいっていまったのです。彼はすぐに安請負して損するｔｙｐｅ（タイプ）だとおもうのです。
　いまの時間は８時なのです。集合場所まで３０分なので準備してからいけばちょうどよいくらいなのです。準備といっても自分用の実機とちょっとした取扱説明書くらいなのですが。

準備を終えてゆっくりお茶を飲んで時計を確認すると、時刻は８：３０を指していた。
では、いくのです。

３０分後です。

到着なのです。
碧城さんはどこでしょうか？彼は意外に時間を守る方なのですが…。ざっとみたところいないようなのですが…。彼は大雑把で自己中心的な思考をもつわりに周囲への気遣いができ、そして鈍感なのです。５分前行動が当たり前で、約束を破るのがきらいで、喧嘩を実力行使でとめるようなひとなのですが…。

いないのです。
仕方ないのです。ベンチにすわってまつのです。。
そうおもってベンチのほうにあるきだしたのですが、遠くからありえないおとをだしながら一台の自転車が車道を走ってきるのがみえたのです。車に追い越しをかけながら。
その自転車はわたしのまえで派手なおとをたててとまったのです。

「わりい！遅れた！（足攣った！？）」

自転車から降りるなりそう声をかけてきた、予想通りの人に思わず溜息を零した。

「おくれるのはいいのですが、事故はダメなのです。」
「まだ事故ってないよね！？俺っ！？（うおぉぉ！？いてぇ！）」
「いつか事故になりそうなのです。あなたがいなくなったらわたし

はどうすればいいのですか。」
「嬉しいこと言ってくれるね。でも、俺以外とも話せるようになりなよ?」
「無理なのです。」
「あっさり!?バッサリ!?お兄さん将来が心配よ!?（わりとマジでな）」
「余計なお世話様なのです。あなたは自分の心配をするといいのです。」
「俺に負けず劣らずの自己中っぷりだな。それよりか、テスターはどこだ?（検討はつくが…）」
「あ。」

すっかりわすれてたのです。
手提げ鞄から、４枚板を取り出して手渡す。

「看板なのです。それをおいてのんびり待つのです。」
「あー、たぶんじゃなくても間違いなくあいつらだと思うんだけど?（怪しすぎるｗ）」

看板を弄びながら彼は一方を指さす。
そこにはこちらを不自然に伺う集団がいたのです。おもわず彼のかげに隠れると、にがわらいしながらあたまをクシャクシャにしてくるのです。

「怯えんな。自分で集めたんだろう?」
「かえっちゃダメですか?」
「いいわけあるか!で?俺にどうしろと?（相変わらずか）」
「とりあえずは接触するのです。」
「……ま、いいや。了解。（作戦開始っと）」

その間はなんなのです！？睨み上げるとなぜかめを逸らすのです！むぅ…。

彼を盾にしつつゆっくりと集団にちかづいていくのです。ちかづくにつれ集団がなにかはなしているのがきこえてきたのです。

「本当にＶＲなんてできんのか？」

「無理だろ。それっぽいことやらされて終わりじゃね？」

「ならなんで来たんだよｗ」

「写真に釣られたのさ。」

「お前もかｗ」

…なにか話題がおかしい気がするのです。

（お前写真ってなに使ったんだよ？）

（ぅ？目印にその看板とわたしのいまの格好？）

（なぜ疑問符？つか見られるの嫌なんじゃなかったのか？）

（写真はわたし自身ではないのです。）

（そういう発想かい。）

はなしているうちに集団のちかくまできてしまったのです。

集団の中から３０後半くらいの人の良さそうな男性が歩み出る。

「貴方方が今回ＶＲゲームの主催者ですか？」

「はい。私は主催者代理の碧城です。主催者は対人恐怖症気味なので基本的に話をさせていただくのは私になります。応募では８名となっていましたが随分いらっしゃるようですね。（何だコイツ胡散クセェ）」

彼はこうゆうところはきちっとやるのですよね。曰く、自己中の極みとは自己利益の追求であるとかなんとかいつもゆっているので

すが…。意味不明なのです。

「えぇ、テストそのものはやるのは気が引けるが興味はあるという人が何人か来ています。問題ありませんか？」

（いいのか？）

（構わないのです。）

「いいですよ。知名度がまだまだ低いので、宣伝していただけるとありがたいです。（一人で開発してりゃ噂にもならんだろな）」

「ありがとうございます。会場はどこになるんでしょう？」

なんでしょう？妙に白々しいのです。

（俺、会場教えてもらってねぇｗ）

（あ…こっちなのです。）

「こちらです。」

わたしが歩き出すのに合わせて彼もそう言って歩き出した。

深月は気づいていない。誰もテスト内容を知らないことを。

ｔｅｓｔｅｒを募集なのです。（後書き）

読んでもらってありがとうなのです！
感想などお待ちしているのです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8060bh/

VRMMOをするのです。

2012年9月27日20時06分発行